

第11期第5回河内長野市市民公益活動支援・協働促進懇談会会議 会議録

日 時：令和7年11月25日（火）14時～16時30分

会 場：河内長野市役所5階 501会議室

出席委員：久、岡島、門林、池西、安井、坂東、池垣（欠席）、仲村（欠席）

事務局：鈴木、吉田、出水、安田

1. 開 会

2. 案 件

- ① 評価シートを基にした今後の取組みについて
- ② 若年層をターゲットとした事業・制度の検討について
- ③ その他

※案件①について事務局説明

久会長：まず市民公益活動の基盤づくりということで、意見交換していただければと思います。

委 員：モニタリング指標はどう調べましたか。

事務局：市民の割合や参加状況等については市政アンケートからの数字です。インスタグラムはそのまま出た数字を使っています。

岡島副会長：本日私も参加している行財政委員会が先にあつたのですが、本来は懇談会参加後に行財政委員会に参加する流れが良いと思います。日程調整が難しいと思いますが。本市のホームページに全体評価は公開されていますので、市民活動に関してはコロナ禍前の数値も掲載していた方が良いです。令和4年の実績値13.8はおそらくコロナ禍の影響で一気に下がっており、そこから徐々に回復してきているのではないかと推察できます。また、「地域のまちづくり活動が充実していると感じている」市民の割合に関しても、同規模の他市を数値で比較できれば良いと思います。

久会長：ありがとうございます。他いかがでしょうか。

委員：まちづくり活動がどのようなものか、よくわからない部分がありますが、私が住んでいる南花台の自治会についてお話します。私たちの地域は4つの自治会があります。マンションの場合は管理組合が主体となり、自治会を担当する自治会部という組織が存在します。戸建ての自治会加入率は約90%で、UR団地の自治会の加入率は10%程度です。それぞれの自治会が活動を行っていますが、戸建ての場合は大掃除の回数が減少しています。以前は月に1回のペースで行われていましたが、現在は半年に1回程度で、雨の場合は中止になることもあります。このように、自治会の活動自体が減少しています。遠足など、みんなで出かけるイベントもコロナの影響で縮小されています。このような状況の中で、自治会の存在感も薄れてきていると感じます。参加状況も低下しているため、満足度も低下しているのではないかと思います。今年は若手2名が自治会の役員に就任したことをきっかけに、これまでの組織を見直す必要があると感じ、環境部会では隣の庭木が問題になったり、犬の糞の始末について話し合ったりしていましたが、これらの活動が必要なのか疑問が生じ、実際部門の縮小が進んでいます。住民の意識も薄れつつあるため、役員の負担を軽減しようとする動きがあります。このような傾向は今後も続くのではないかと懸念しています。来年の役員募集が現在行われているようですが、地域の活性化に向けての取り組みが重要だと考えています。この状況から考えれば、現状の傾向は仕方がないのかもしれませんが。

久会長：ありがとうございます。他いかがでしょうか。

委員：やはり高齢化が一番の問題ではないかと思います。私の地区では青年団に色々なことで動いてもらっています。80歳以上でも元気な方が多くいますが、だんだん一人暮らしが増えてきたため、参加率は減ってきています。参加者が減るのは仕方がないと思いますが、このアンケートの取り方についても改めて考えなければならないと思います。老人クラブの活動も含めてアンケートを実施すれば、参加率が少し上がるのではないかと思います。

久会長：ありがとうございます。他いかがでしょうか。

委員：私は三日市町にある楠ヶ丘地域に住んでいます。自治会やまちづくり活動が活発かどうかわかりません。楠ヶ丘地域では多くの方が自治会に参加していますが、自治会が活発なモデル例や具体的にどのような活動が活発なのか教えていただきたいです。私は今まで河内長野市以外のことをあまり知らないため、広い視野を持って勉強させていただけると幸いです。楠ヶ丘地域でも「役員にな

りたくない」という声を聞きます。私自身もやめたいという気持ちがあります。若い会長が自治体のお祭りに向けて準備し、地蔵盆などのイベントも行っています。これまでは高齢者が主体だったため、若い人たちが入りにくかったのですが、今は若い会長さん中心になり、違った形で活気を持たせていると感じます。ただし、自治会の会議にはしっかりしたメンタルが必要で、高齢者からの抵抗もあるかもしれません。古いやり方に対して何かおかしいと感じることもありますが、これまでの流れが根強いと意見を持つことが難しくなってしまうと思います。今年は新しい取り組みをしていると思っていますが、古い考え方に囚われてしまうと、若い人が入りにくい状況が続いてしまうと感じています。また、自治会長であった方が鬱になり、職場復帰が難しいという事例も見受けられますが、これは人間関係の難しさから来ているのかもしれませんが。お年寄りやこれまで活動してきた方の意見も重要ですが、一定の変化が必要だと考えています。今後の自治会には、若い人の意見を取り入れながら、新しい活動を進めていかななくてはならないと思います。また、歩いて三日市町駅まで行けますので楠ヶ丘地域には新規入居者も多く、若い人たちが「自治会に入りたい」と思える環境を作ることが大切です。活発な自治会の事例についても、ぜひお聞きしたいと思っています。

久会長：この施策評価について、先ほどいただいている意見も踏まえ、市役所として昨年度取り組んだ内容について何か回答はありますか。

事務局：昨年度の評価シートをいただいた中で1年間の活動となりましたが、皆様方の意見は全国的な風潮であると感じています。その中でInstagramを今年度からスタートし、情報発信を行ってまずは知ってもらうことを目的としています。また、多くの方々から聞かれた次の世代や若者層にも届けたいという思いがあります。昨年度、フォロワー数の目標は300でしたが、当初の目標には達していませんでした。しかし、現在は350まで増えてきています。まず知ってもらうことに注力し、特に昨年度はそこに重点を置いて進めてきました。これを基本方針に基づき、今後も皆様方からいただいた様々なご意見をもとに次年度以降も新たな取り組みに進化させていきたいと考えています。昨年度の交流会では、大阪市内で活動している現役サラリーマンの会長をお招きして、どのようにして大変な職務を身軽にできるか、LINEの活用など人付き合いの話もありましたが、現役世代でも会長ができるという体験談通じてお話をいただきました。もちろん環境や地域の考え方も違いますが、ご参加いただいた方の中から「パワフルな方が現れると雰囲気が変わる」という声もいただきましたので、他の市町村で活動されているの方々をお招きして河内長野風にアレンジしつつ、

新しく模索していただけるような環境づくりは今後も進めていきたいと考えています。

久会長：私は阿倍野区のまちづくりもお手伝いしているのですが、地域がもともと元気なので、会長の世代交代やバトンタッチが果たしてうまくいくのか難しい部分もあると思います。10月に行われるハロウィンや地蔵盆のイベントは内容が同じで、子どもたちが地域を回ってお菓子をもらいます。ハロウィンは親子世代が頑張っているのですが、地蔵盆に関しては参加者が少ないのが現実です。先ほどいただいた意見とも関連していて、おそらく地蔵盆は歴史があるため、「こういうやり方をしなさい」と指示されることが多いのではないかと思います。一方で、ハロウィンは新しいイベントなので、アイデアを出して参加者がどんどん自分たちで活動を展開しています。これが参加者数の違いを生んでいるのだらうと感じています。したがって、若い人たちに前に出てもらうためには、先輩方があまりあれこれ言わない方が良いのではないかと思います。

委員：おっしゃる通りで、新旧の意見をぶつけ合う議論は大切だと思います。ただ、その結果関係を悪化させてしまい、次の議論の機会を失うことがあるのも事実です。議論を行うこと自体は非常に前向きな営みであり、必ず解決策はあると信じています。とはいえ、意見を受け入れてもらえないと感じると、自分自身が辛くなることもあります。不思議なことですが、今もなお議論が活発なのは、伝統や価値観の違いが背景にあるからでしょう。若い世代の考えを受け入れられるのが理想ですが、そのことに対して恐れを抱く人もいます。特に地域が近いからこそ、そうした不安が強まるのだと思います。もちろん平気な方もいますが、女性や主婦にとっては日常的に意見を言いづらい雰囲気があるのも事実です。自治会に入っていないくても、近所で犬の散歩をしているときなど、自分の意見を口にすることで小さな抵抗を感じる場合があります。こうした状況を避けようと努めていますが、やはり難しさを日々実感しています。

久会長：宝塚市も小学校単位でまちづくり協議会を作っており、20数年が経ちましたが、うまくいっているかどうかは疑問があります。地域活動を行っている方々にも参加していただき、運営のガイドラインを作成しました。その中に「地域の会合で言いたいことが言えているか」というチェック項目が含まれています。チェック項目を作成しなければならないということは、そうした雰囲気になっているかもしれないですので、取り組む必要があると思います。宝塚市を参考にしながら、地域活動のチェックリストを作成し、皆が楽しくき活き活きと活

動できているか評価することも重要だと思います。大阪市東成区では月1回井戸端会議を開催していますが、ある40代前半の方から興味深い話がありました。彼女は「私に直接言われるのは良いけれど、お姑さんを通して話が入ることがある」と話していました。お姑さんから情報が入ると、やりにくくなってしまうという問題があり、大阪市内でも旧村のような状況があるのかもしれませんが。そのような環境では、話がしづらくなることも理解できます。その様子に気付いてしまうと、若い方々が意見を言いにくくなるのではないか、という気がします。

委員：おっしゃる通りだと思います。特に私が住んでいるところも、どちらかと言えば旧村の流れがまだ残っています。私も個人的なことですが、結婚した次の日から姑と同居を始めました。もうずっと若い頃から一緒だったので、やはり自治会に参加し、役員になったおばあちゃんが「役員をやるのが嫌だ」と言っていました。そして帰ってきたら「誰々がこんなことを言っていた」と聞いてきたり、「あなたは余計なことを言っていないでしょうね」と言われたりするのですが、自分自身でも特に身にしみる経験です。経験のない方には多分わからないと思うのですが、特に河内長野は私のようなタイプの方もいると思います。姑に全部任せるとするのは理想的ですが、誰かのおばあちゃんがこんなことを言っていたと聞いたら、その姑はまた違うところへ行って広めるので、今の若い人には考えられないような状況です。私は負の問題だと思って嫌でしたので、個人的には姑と揉めることが多かったのですが、外では自治会もありますから言わないようにしていました。そういった経験を経て、とても理解できるようになりました。

久会長：逆に旧村ではリーダーが変わると思い切って大きく変わることもあります。旧村の会長さんが20年ほど前に言われたことが印象に残っています。「よそのもの」という言葉を使うな」と言い、理由を尋ねると、「あなたの嫁もよそ者だ。必ず村の中にもよそ者がいるだろう」とおっしゃったのです。そのあたりから雰囲気が変わったように思います。他いかがでしょうか。

委員：地蔵盆などの行事は若い方々に任せることが重要です。色々なことに取り組むことができますし、子ども達が喜ぶような試みが多く、子どもたちが様々なことを経験する機会を提供しています。そのため若い方々にお金を渡して活動を行ってもらい取り組みは年々増加しています。私たちの活動は、1つの町会だけでなく、隣の町会からも子どもたちが参加するようになっています。それは良いことだと思います。若い世代に任せるのがベストだと感じています。年配

の人たちは体が動けないことが多いですが、資金を提供することができます。意見を出すことも大切ですが、「年寄りはお金を出す」方法でうまくいっています。三日市町の「ふれあい祭り」でも同様で、従来は単に場所を提供するだけでしたが、「子ども達で綱引きをし、お菓子を配るので資金の支援をお願いします」と若い方々からお願いがありました。小さなことから活動を広げることが大事です。

岡島副会長：とても興味深い話でした。2点お伝えしたいことがあり、1つ目は地域活動での高齢者の在り方で、高齢者の中でもつい口を出してしまう方がいますが、高齢者同士で「口出しはやめておこう」という共通理解を持つことが重要です。2つ目は先生がおっしゃった宝塚市の話で、非常に大切なお話しだと思いました。私は富田林で「子どもの権利書」というワークショップを行い、子どもたち同士の交流も促進していますが、必ず「話し合いのルール」というものが大切です。以上が私の考えです。どうぞよろしくお願いたします。

委員：パソコンを使わない高齢者にも分かるような発信をしていかないと、情報が届かないと思います。

委員：補助金は、件数は少ないが、審査員のアドバイスを受けて成長している団体もあります。

久会長：昔は隠居制度があり、大局的な判断をする役回りを担いつつも、若い人たちにも権限を一部委ねるといった役割が社会にあったはずですが、時代が変わると雰囲気も大きく変わってきています。民俗学者の宮本さんが「忘れられた日本人」という本を書かれていますが、その冒頭に対馬の話し合いが出てきます。三日三晩徹夜で議論を続け、最後に長が出てきて「君たち、いろいろ聞いてきたが、そろそろ落としどころをつけよう」ときっぱり裁定を下すという伝統が昔はあったのではないかと思います。最近、年長者が最初からあれこれ強く主張してしまうことが多いように感じますが、昔はもっとどっしり構えていて、若い人たちに議論させた上で最後の裁きは長老が担うという良い役割分担があったはずですが、ですので、新しい改革を進めるだけでなく、昔の良いやり方を取り戻すような議論があってもよいのではないのでしょうか。役員の順番が回ってきたのですが、私の地域は少し面白い構成になっています。旧村の住民がしっかり根付いている一方で、その周りには新興マンションが多く、新旧住民が混在している状況です。普段から新興の方に協力してもらっており、会長曰く「新興世帯などは負担が大きいので、まずは旧村の人たちが基盤を固め、必要

な時に新興の方へ手伝いをお願いし、旧村に任せられる部分は積極的に委ねるべきだ」とおっしゃっていました。そうした関係性があるからこそ、旧村側も新しい住民も、それぞれできる範囲で役割を担いやすくなるのだと感じました。地域の核となる人たちが周囲の力を巻き込み、どう参加を促していくかが大切だと思います。こうした事例や情報をどんどん集めて自治会運営のガイドラインや事例集を作るといいのではないのでしょうか。促進用のパンフレットも有益ですが、それよりも「どうすれば住民に気持ちよく協力を頼めて一緒に活動してもらえるか」というノウハウ集があれば、基盤づくりに大いに役立つはずです。これも基盤づくりです。

委員：南花台の子ども会がなくなったのですが、理由としては保護者が仕事や家庭で忙しく十分に参加できないという状況が続いていたためです。そこで地域の高齢者が担い、保護者が関与しなくても運営できる仕組みをつくりました。名前は「子どもクラブ」で組織化したところ、おおむね半数くらいの子どもの参加するようになりました。それまでは参加者がどんどん卒業して減っていくことに加えて、保護者が役員の当番が回ってきてしまう4年生の前にやめるということがありましたが、今では6年生で卒業するようになっています。この活動は約10年前に始まりましたが、当時の担い手がずっと在籍しているわけではなく、世代交代がありつつ、毎年平均年齢が少しずつ上昇する傾向が見られます。保護者にはサポーターとして行事のときだけ手伝ってもらって運営にしており、保護者の方が再び役員に戻ることもあります。また、ある程度の年齢に達した役員は相談役として支える役割に移ることが多く、元々南花台の活動は戸建て中心でしたが、どの自治会の人でも参加しやすいようにしています。年会費は400円で保険代のみを賄い、イベントごとに参加費をいただく方式にしているため、毎月の会議はなく、保護者にも子どもにも参加しやすい運営になっています。こうした地域の子どもの取り組みをヒントに、新しい活動が生まれればいいと考えています。例年10～11月頃から指名委員会が始まり、声をかけて役員をお願いする作業が続きましたが、今年は広報を通じて自治会の役員募集も行い、広報活動を少しずつ進めています。役員の負担は大きいので、手を挙げてくれる人が必要ですが、その際にサポーターが常に支援してくれる体制がないと運営は難しいと思います。

委員：自治会あるあるのようなルールや手順を楽しく漫画にするのがよいのではないのでしょうか。皆さん、批判を受けるのはやはり嫌だという気持ちがあります。結果が良いか悪いかにかかわらず、個人に責任を押しつけるのはいけないと感じます。自治会が成り立っているのは会長をはじめ役職を引き受ける人たちが

いるからであり、役職に就くことで一定の責任が伴うのは事実です。しかしだからといって、すべての失敗を一人の責任に帰すべきではありません。仕事で収入を得ている場合であれば批判に耐えられる面もあるかもしれませんが、ボランティアとして「良かれ」と活動している人に対して批判を向けるのは活動継続の大きな障害になります。実際に活動していると、そうした厳しい声を毎日のように耳にします。立候補して企画を考え意欲とエネルギーを持って真面目に取り組んでも、結果についてあれこれ言われるのは辛いものです。「あなたがやったのだ」と個人を責めることはやめてほしいと願っています。こうした事情から、自治会では個人に責任を押し付けないという考え方が求められると思います。ボランティア活動に対して厳しい目が向けられることは多いですが、その重圧に耐えられる人はそう多くないはずで

久会長：何でもかんでも調整役にされ、うまくいかなかったら文句だけ言われる状況では、誰も引き受け手はありませんよね。だから、その関係をどうするかということが重要だと思います。

委員：総会は本来2時間の予定ですが3時間かかることもあります。劳いの言葉が少なく、むしろ批判されることが多いです。ボランティアでやっている立場としては、「ご苦労さま」や「ありがとう」といった一言があるだけでずいぶん励みになるのに、批判ばかりだとやる気がそがれてしまいます。だからこそ、そうした場面で何らかの工夫が必要だと思います。会合を合わせたらず一声「お疲れさま」や「ありがとう」と言うだけで雰囲気は大きく変わります。たとえ社交辞令めいた言葉でも、無いよりは有ったほうがいいです。もちろん、嘘をつくのはいけません、人間関係では相手を気遣う一言が大切だからです。逆に、いきなり怖い顔で「あんた、何をしているの？」と詰め寄られると気持ちが悪くなります。実際、総会は高齢の男性が多く、若い女性の姿はほとんど見かけません。ガツガツした雰囲気で「こんな企画でこんなことをやっているのか」と冷ややかに言われることもあります。まずは皆が笑顔で「こんにちは」「ありがとう」と声をかけ合うことを心がければ、場の空気はぐっと良くなるはずで

委員：やはり楽しくなければ続けられません。何事でも同じですが、ボランティア活動も例外ではなく「やってよかった」や「疲れたけれど皆が喜んでくれた」という経験があるからこそ「次回もまた参加しよう」という気持ちが湧くのです。ですから、気の合う仲間や組織と一緒に活動していくことが大切なのかもしれま

せん。また、その中での活発な意見交換は大いに意味がありますし、さまざまな意見が出るのは当然のことです。とはいえ、最終的には「これでいこう」と皆が納得できる方向性を定めることが重要です。そのような意識が全員で共有できたときに活動は続いていくと思いますが、現実にはその点がうまくいかない場面もあり難しさを感じています。

委員：ボランティアで活動してくださっているのですから、まずは感謝の気持ちを伝えるべきだと思います。ただ、その感謝の言葉のかけ方によっては、かえって皆が失敗を恐れるような雰囲気を生んでしまうことがあります。総会でも「ここはおかしい」と指摘するばかりでなく、「本当に良かったです」や「あなたのおかげで成り立っています」といった前向きな声かけが大切です。誰も引き受けたがらない状況のなかで、なぜ多くの方が手を挙げてくださるのか——私は楽しませていただいた、という気持ちをきちんと伝えることが重要だと考えます。それ伝えると「あなたの言っていることは間違っている」と反論されることもあるかもしれませんが、人としてどちらを選ぶかという問題は、自治会活動にも当てはまると思います。私はまだまだいろいろ経験している途中です。これからも学びながら、そうした心遣いを大切にしていきたいと思っています。

久会長：そういうことを言う人に限って自分は何もしないものです。実際に自分が動けば辛さが分かるはずです。逆に自分が言える立場になって初めて事情を理解できれば文句は出なくなると思います。

委員：その時に「改善できるのなら、あなたがやって」と言うと急に黙ってしまいます。そうすると、参加するのは面白くないと感じ、会っても挨拶をしないようになってしまいます。

委員：関係がこじれて引っ越した方もいらっしゃいます。私もそうなりたくないから自治会を離れようと考えたりもします。

委員：やはり大変なのは“役”です。来年役員になる予定だと「なる前に自治会をやめよう」という人も実際多いです。私の自治会では、必ず会長を補佐する副会長を1年こなしてから会長になってもらい、会長になってからまちづくりの部会に参加します。社会活動をしている人たちには「どうせ暇だろう」と思われがちですので「あなたがやって」と言われてしまうのです。

久会長：本日はさまざまなご意見をいただいております。こうした取り組みは今後も継

続し、内容を整理して皆で共有できればと期待しています。

委員：市政アンケートの件ですが、まちづくり協議会の関連にもアンケートを取ってもらえば数値はもっと高くなりませんか。

事務局：前回も同様の声を頂戴しておりますが、アンケートの指標に関しては幅広く市民の声を拾うことを基本として実施しております。次年度以降に市政アンケートの取り方や評価シートの作成に関しても変更があるかもしれません。

久会長：地域のまちづくり活動が充実しているかアンケートに答えていただいておりますが、答えている人によって感じ方や捉え方が異なるのではないかと思います。地域活動に力を入れている方々は様々な活動を行って充実しているはずですが、極端に回答の項目が低くなっている点には疑問があります。実際、地域の充実度は極めて低く2割にも満たない点は何故なのでしょう。もしかすると、アンケートの聞き方に問題があるのかもしれません。そこを解明しないと、どうすれば改善できるかわからないので難しいです。

委員：例えば大掃除など各自治会ではさまざまな活動が行われていると思いますので、どのように参加しているか尋ねるアンケートであれば答えやすいのではないのでしょうか。アンケートの質問内容だと具体的に何が充実しているのかが示されていないため、答えづらいと思います。具体例を挙げてアンケートを実施すれば参加率は上がると思います。ポスティングしてアンケートに答える時には、ある程度回答者がイメージできるような形式が必要だと思います。そうしないと、答えるのが難しくなってしまうでしょう。

事務局：ありがとうございます。おっしゃる通り、アンケートの実際の項目についてお話ししますと、参加度に関しては「この1年で市内の地域活動やまちづくり活動にどの程度参加されましたか」という質問があります。この地域活動やまちづくり活動には、米印がついており、自治会・町内会・PTA・教育、青少年育成、環境美化、福祉など、有償・無償を問わず幅広い活動を記載しています。一方、充実度については、「地域のまちづくり活動が充実していると感じていますか」という一文の項目のみですので、おっしゃる通り、充実していると感じる基準は受け取る人によって大きく異なるのではないかと思います。

委員：例えば盆踊りのイベントは当然地域活動の一環です。普段は、かなりの数の方が参加されると思いますが、それだけで充実しているかどうかはまた別の問題で

すので、その辺りはわかりやすい質問が良いと思います。

久会長：その辺りの構造がわかってくると、どこに力を注げばよいか見えてきます。5割近くの人がアンケートに回答しているにもかかわらず、実際には充実が感じられる方は2割にも満たない状態です。これをどのように捉えたら良いのか、あるいは一部の役員の方々が頑張っているものの、負担が大きいために嫌がる人もいることも含めて、充実させるためには誰がどのように動いたら良いか、どのように読み解き、どうすれば効果的に改善が進むのか、全体の構造を皆さんと共に考えていけたらと思います。他どのような意見がありますか。

岡島副会長：最終評価としては前年度と同じでB（一部課題有り）だと思います。会合のルールやアンケートなども考える必要がありそうです。

委員：自治会の存在意義について考えると、自治会がなくても良いという意識が若い世代には有ると思います。一方、年配世代にとっては、例えば回覧板を隣に持って行くことが負担になっている場合や、ほとんど回覧の中身を見ずに判子を押してしまうことが多いです。このような状況が続くと、地域のつながりがなくなってなくなってしまいます。私たちの地域では掃除の回数が減ってきました。そうすると、近隣住民との顔合わせの機会も減り交流が少なくなります。ある程度自治会活動が活発でないと、その存在意義が薄れてしまいます。だからこそ、一般会員に重要性を知らせて、役員に参加してもらう必要があります。「やらなくても良い」という姿勢ではいけませんし、活動がなければそもそも存在し得ないのです。そのあたりの問題について、市の広報などで自治会活動の重要性をアピールすれば良いと思います。例えば、「この地域ではこうした人材活動を行っています」といった内容も含めることで、地域における自治会の意義を広めることができるでしょう。

委員：おっしゃる通りです。私が自治会の役員になった時、脱会の相談を受けたのですが、自治会に加入するメリットとデメリットをきちんと説明できなかつたです。自治会に加入していなくてもゴミの収集が利用できて夜間の電灯もあります。実際、脱会した人に1年後近所で会うと「脱会して1年経つけど、何の影響やデメリットもない」と言われました。しかし、委員のおっしゃるように、一度でも自治会活動に参加していれば災害時のつながりなど有事の際に自治会の重要性に気づくことが考えられます。そうした点を市の広報などで紹介していくのも一案だと思います。役員になること自体は仕方のないことですが、その意義や利点を説明できる委員や説明できる担当者が必要です。私を含め多

くの住民が十分に理解していないと感じます。一度議論して、これらの点を丁寧整理することが必要だと思います。

委員：福祉委員会は自治会も対象ですか。

委員：そうです。自治会や老人会も含めて福祉委員会の対象です。

委員：災害時の要支援者のリスト作成も福祉委員会と社協が共同で行っていることも自治会活動の1つです。

委員：私は知りませんでした。災害時に例を挙げても、自治会の加入有無で助ける・助けないといった判断や気持ちにならず、「みんなで助けよう」となりますので、尚更自治会に入るメリットを説明することができませんでしたので、どうか知恵のある方に整理していただきたいです。

委員：ですので総合評価の課題の中に、「自治会活動をアピールする記事」を考えていくことも追加していただければと思います。

久会長：天野小学校区でお話をさせていただいた自治会活動についてですが、明治時代以降近代化が進むに連れ、地域で互いに支え合う仕組みが薄れていったということです。哲学者の鷲田清一先生も中庭にテントを張ってバーベキューをし指摘しているように、江戸時代までは村単位でさまざまな事柄を共同で行ってきました。ところが、明治期以降は政府が一定の責任を引き受けるようになり、行政がさまざま提供する方向になりました。加えて、政府が対応しない部分については民間企業が有料でサービスを提供するようになり、結果として「互いに支え合う」仕組みが弱まってしまったのです。この状況を根本的に変えない限り、単にメリット・デメリットを議論するだけでは終われず、私たちの生活や価値観そのものに影響が及び続けるでしょう。現在は「メリットがあるから参加する、デメリットがあるから参加しない」といった個人の利害に基づく判断が広がっていますが、だからこそ互助の精神をどう維持していくかが重要です。方向性を変えるには時間がかかりますが、変えなければ同じ議論が繰り返されるだけだと思います。介護に関してですが、資金のある人がどんどん民間サービスを利用できるため、地域の支えがなくても介護が成立してしまう面があります。こうした仕組み自体を見直さない限り、地域の相互扶助はなかなか回復しないのではないかと考えています。そのきっかけの一つが災害だと私は思います。災害時には民間サービスも提供できなくなることが多く、結局は「お互い

さま」の関係がなければ地域はうまく機能しません。難しい問題ではありますが、そう感じています。

岡島副会長：Instagramの周知に関してですが、こういった周知を行っていくのでしょうか。

久会長：1万人は難しいと思うのですが、フォロワー300人は難しいですか。コンテンツに問題があるかもしれません。如何に面白いコンテンツを頻繁に出しているのか、その辺りいかがでしょうか。

事務局：現状、サポートセンターで行っている事業の紹介など奥河内ラジオ番組を通じて、さまざまな方々が交代で出演し紹介を通じて情報発信が進んでいます。

久会長：私が担当する茨木市の拠点では、InstagramやX（旧Twitter）でどれだけ見られているかが非常に重要となっており、広報ユニットが中心となり発信をいかに魅力的にするかを検討しています。半年ほど前から、リーダーが提案したのは私たちだけで情報を集めて流すのは限界があるという点です。200人以上のスタッフが動いているので、面白いネタがあればすべてLINE WORKSに投稿してもらい、その情報をピックアップして発信を強化する方法を取り入れています。そうしないと良い反応は集まりにくいと考えています。実際、告知よりも何気ない日常の風景のほうが多くの「いいね」を獲得しています。例えば、子どもたちが参加して盛り上がったイベントの様子など、スタッフが目にした日常の一コマを積極的に提供してもらう必要があります。情報発信を一部の人に任せきりにすると負担が大きくなり疲弊します。そこでネタの集め方を工夫する必要があります。大学と連携して学生を巻き込める点を活かし、私はInstagramでハッシュタグキャンペーンを行い、「いいね」が最も多かった投稿者に1万円を贈るといったインセンティブを導入しています。通常はこのような取り組みはあまり行われませんが、注目を集めるための有効なアイデアだと考えています。単にQRコードを配ってフォローを促すだけでは、なかなかフォロワーは増えないでしょう。また参考にしていただければと思います。評価シートの基盤づくりに関しては以上で終了いたします。

次に市民と行政に移ります。ボランティア・市民活動センターの新規登録数は目標値よりも高くはありますが、こちらも満足度の数値が低いです。協働担当以外で面白いイベントなど増えていますか。

事務局：直接連携しているわけではありませんが、各部署が市民を巻き込みながら多様な取り組みを進めています。大学や学生と連携した取り組みについても、6年度というむしろ7年度の万博に向けた動きが前年度から既に始まっていたと感じています。その機運を受け、令和6年度から7年度へ向かう過程で、各部署の取り組みが活発化しているのを実感しています。7年度に入って波が生まれている今、その動きをうまくつなげていければ、今後さらに効果的な展開が期待できるのではないかとえています。

久会長：何か一つ満足度が一気に上がるイベントを行う必要があると思います。

事務局：どういったイベントが良いのかご意見やアイデアをぜひお聞かせください。

委員：評価指標である「市民同士の連携や市民と行政の協働に関する市民満足度」という言葉がわかりづらいです。

事務局：協働の点から見ると、行政だけではなく市民も一緒に取り組んでいること、単なる市役所主導のイベントではなく、地域の方々と行政が企画や運営をしながら進めている点が重要です。したがって、行政としてはこのような協働の姿勢を今後も求め、重視していく必要があります。

委員：私たちは市の文化財を保全するボランティア活動で、見学者に建物の説明も行っているのですが、協働としてデータに含まれていないのではないのでしょうか。

事務局：市民がその活動を知らない可能性もありますので、認知度を増やせば数字に繋がるのではないかと考えています。

岡島副会長：アンケートに記載されている「協働」という言葉には馴染み無いので答えにくいので満足度にも繋がらないのではないかと思います。おそらく学生も協働という言葉聞いてもピンと来ないのではないのでしょうか。先ほどのお話に関連すると、1枚目の地図は決して単純なものではないと思います。まちづくりを考えると、まちづくり協議会や自治会、町内会といった地域の組織やNPOなどの団体も関わってきますが、やはりアンケートになると興味や関心が無いので答えることが難しいのだと思います。10年前をピークにコロナ禍前よりも満足度の数値が下がっていることが気になります。

委員：例えば大掃除の時に市の職員が来るのはどうでしょうか。

委員：南花台でイベントをしている時に、市の職員が見学や参加をし、一緒に大きな成果物を作って、寄り添うことが協働だと思います。

委員：以前ジャズフェスタを開催した際に、市の職員が各地のまちづくり協議会に若手2人ずつ派遣してくれていました。その若手が中心となって、出店し売上をまちづくり協議会に寄付するなど、一緒に活動していた記憶があります。ただ、それ以外では、私たちが市の職員と連携しているという実感はあまりありません。一般の方から見ると、尚更見にくいと思います。

委員：社協の方は、身近にいて活動に寄り添ってくれているという意識が芽生えますし、様子を覗いてくださることも非常に重要です。足を運んでくれるだけで、次回の提案も生まれることもあります。逆に接点がまったくなければ、市民に「協働」という言葉は響かないでしょう。小さな取り組みの積み重ねが、協働の輪を広げていくのではないかと感じています。

久会長：何か一つ満足度が一気に上がるイベントを行う必要があると思います。茨木市のオニクルは、今年で2年目を迎えました。毎年全館でさまざまなイベントを行っています。今回目玉の一つとして、市内高校の軽音楽部に声をかけ、自分たちで企画・運営するコンサートを開催しました。すべてを動かすのではなく、外部の人を巻き込んで進めるのが市職員の得意なところです。参加者が集まり、企画委員会で活発に議論してもらいます。私たちはサポートに回り、実際に主体的に動くのは市民のスタッフや関係者です。この前の日曜日に行ったイベントでは、主体的に関わって会場全体で楽しんでいると、企画に参加していない人も「何か面白いことをやっている」と参加しました。こうしたイベントを増やしていけば、楽しそうな空気が自然に広がっていくと思います。1年目の来館者数は200万人で、今年も170万人の来館を想定しています。「キックス」と同様の施設ですが、活動を通じて積極的に面白いものを創ることが好まれるのではないかと考えています。また、市民の声に応えることが私たちのポリシーで、昨年「オニクルに泊まりたい」というユニークなリクエストがあり、休館日に親子20組を限定で宿泊してもらったところ好評を得ました。1年目はスタッフも交えて楽しい取り組みが実施され、今年は危機管理課と連携して、多くの人に参加できるイベントを計画しました。中庭にテントを張ってその中に煙を入れて煙の中を逃げる訓練をしたり、防災リュックを背負って子どもたちがどれだけ走れるかを競う企画など、みんなで楽しめる催しを増やしています。また、トランプマジックを披露してくれた若手の市職員がいます。真面目な取り組みも大切ですが、みんなが楽しめることを取り入れることで、市の職員も活

き活きと賛同していただけたと思います。ジャズフェスティバルも新しいことを始めることで多くの人に関わりやすくなりますし、地域の方々が協働で支える仕組みづくりにもつながるのではないのでしょうか。ぜひそうした取り組みを進めて欲しいのですが、いかがでしょうか。

委員：来月にクリスマス会を開催するのですが、教育委員会だけに関わるのではなく、さまざまな部署が関わるのが重要です。たとえばキックスでは多彩なイベントが開かれているので、それぞれの部局が関与して参加してもらうことが大切です。取り組みは一部の部局内だけ留めるべきではありません。子どもを対象にしている場合でも、高齢者など誰でも参加できるようにすべきです。今回のクリスマス会は現状だと子ども会にしか案内が届いていませんが、もっと広く周知してくれる人や団体にも関わってもらえれば、市民との接点はさらに増えるはずです。さまざまな部局が関与している事例を参考に、こうした取り組みにより一層力を入れていくべきだと思います。

委員：11月にラブリーホールで文化祭が開催されていました。税金を使って開催しているのか、一部の参加者が費用を負担しているのかはわからないのですが、多様な才能が集まる場としてラブリーホールの大ホールを借りることができているにもかかわらず、ほとんどお客さんが入っていない状況でした。イベント自体に魅力がないために人が入らないということも考えられますが、その状況を参加者だけで満足していくのはあまり存続の意味がないのではないかと思います。70年の歴史を持つ文化連盟は、他の市町村にはない貴重な存在だと聞いています。大きな場所なので、高齢者だけではなく、もっと多様な世代が参加しても良いのではないかと感じます。久会長のおっしゃるように、文化祭の形を変えて大々的に開催することによって、もっと若い子供たちが参加し、どんどん来てもよいと思います。個人でラブリーホールを借りることは難しいでしょうが、大事な活動ですので、もっと多くの人に来てもらい、河内長野市を盛り上げることが重要だと思います。仕掛け次第ですが、もう少し子どもたちや若い世代のエネルギーを爆発させる内容に変えていくべきだと思います。個人的にはそのように感じました。

久会長：高校生に、大ホールを使っただけイベントを行いました。あれほど大きな会場で演奏する経験はなく、彼らにとって非常に貴重なものでした。演奏後には「楽しかった」という声が多く上がり、熱気やエネルギーを強く感じました。こうした経験から、どのようにして参加者や観客を引き寄せるかが重要だと改めて実感しました。ところが、市民がイベントの会場を予約するには6か月前から

でなければならない一方で、10月や11月のホールは土日がほとんど埋まっているという現状があります。約6か月前になると、文化振興課が団体に代わって全ての枠を押さえてしまうことがあるようで、これが問題になっています。そこで、私は予約枠を増やしてほしいと要望しました。委員がおっしゃったように、やりたいことがあっても予約を行い集客が見込めなければ意味がありません。楽しいイベントを増やしていかなければ地域の活性化にもつながらず、また、特定の団体が先に枠を押さえてしまうと他の団体は参加しにくくなり、多様性や面白さが失われてしまいます。

委員：私自身が会場にいたわけではないので断定はできませんが、全体を通して観客数はそれほど多くなく、ジャズダンスには若い観客が一部いるものの、小さな子どもを連れてくるのは若い家族層なので、来場者は多少増えたのかもしれませんが。一方で、お年寄りが出演するステージでは、演者に余裕や活気があまり感じられず、参加者数の総数がどれほどだったのか判断しにくい状況でした。それでも参加者としては、一人当たり何千円かの参加費を払って喜んでいるのではないかと思います。市民全体の満足度については、文化祭そのものを知らない人がまだ多いと感じます。イベントが数日にわたって続くことが前提になっているため、関係者は初めから来年に向けた企画を進めるのでしょう。ただ個人的には、ここで発想を変え、若い世代の熱量を地域の活性化にもっと活かすほうがよいと考えます。批判はあるかもしれませんが、現状のままでは少しもったいないと感じました。

久会長：先ほど、色々な部署が共同で進めていると伺いました。外から見ている限り、従来の付き合い方にとどまらず、楽しくて面白く、活気が生れるような形でどんどん広がってほしいという期待があります。ちなみに、市民会館の建て替えは本来文化振興課が担当する流れになるのですが、あえて文化振興課以外の部署に担当を持ってもらい、既存の文化団体の既得権益に繋がらないようにしました。その意図は新しい人たちがもっと自由に楽しく使える場をつくるためです。文化振興課には既存団体の対応を引き続きお願いしつつ、新しい参加者と一緒に場を盛り上げていこうという戦略でした。今後は、共同で進める案件ごとに「誰が担当するか」を柔軟に決める発想が広がれば、関わるパートナーの顔ぶれも変わり、より楽しく活気のある協働が増えていくのではないかと考えています

岡島副会長：市民活動と市民公益活動は接点を増やすことが重要ですが、両者は性格が異な

ります。たとえばファッションショーのようなイベントも協働を支援していると考えられます。河内長野にはボランティアセンターや市民活動センターのように、文化と接点を持てる拠点があると思います。キックスの活動もその役割を担っており、周辺で音に関する制限があるかもしれませんが、イベントを開催することで文化との接点を生み出すことが大切です。参加する人々の年代構成も影響しますし、子どもが来場すると母親の参加が促されやすく、参加の導線が変わります。SNSで申し込みができるようになった一方で、手続きや環境の複雑さから参加が難しく感じられることもあります。戸惑いや混乱が生じるのは仕方ない面もありますが、改善の余地はあると考えられます。

委員：ファッションショーの第1回ですが、多様な方々にお集まりいただきました。ご高齢の方（90歳を超える方も）から若い方、さらに市役所や社会福協議会の職員まで幅広い参加がありました。参加者の方々は、人前での発表を楽しみながら元気に活動され、とても有意な時間を過ごしました。生きがいについて、今後さまざまな部署と連携して進めていきたいと考えています。特別なファッションをする必要はなく、例えばスコップやちり取りを手に「ボランティアをする」ファッションで参加くださいました。そうした姿を見て、私も元気なうちはボランティアを続けたいと強く感じています。イズミヤの施設については、健康マージャンを活用できないか検討しています。現在、女性の間で人気が高く、NPO法人たすけあいでも取り組んでいます。健康マージャンでは、対面する4人がその時間だけはおしゃべりを交えながら手を動かし、頭を使います。教えてくださる方の多くはかつてサラリーマンで、ビジネスの一環としてマージャンに親しんだ世代です。彼らは70代、80代になり、知らない女性たちに教えることを生きがいにしていきます。しかし拠点を失って活動が途絶えてしまったため、イズミヤの4階を拠点に再開できればと考えています。人気が高まっているのは本当に喜ばしいことです。

岡島副会長：特殊分野ではないボランティアと、市役所との連携があると文化との接点が協働を通じて様々なやり方が広がっていくのではないのでしょうか。

久会長：ちなみに音の問題はオニクルの施設で言うと、5階・6階は図書館になっており、音が漏れては迷惑がかかることとなります。中央に大きな吹き抜けがあるため、どんなに注意しても音が響いて聞こえてしまいます。そこで、スタッフ会議の場で「何月何日の何時から何時まで音が出ます」という予定を全員で共有するようにしています。もし音があまりにひどい場合には、その場で即座に中止するよう求めています。終了後は、音の状況について「いかがでしたか」と確認し、

どの程度なら許容できるかを少しずつ積み重ねていきます。先ほど申し上げたように、市民が何かをやりたいと申し出たときに最初から「だめです」と言ってしまうと、協働の出発点がつかれません。まずは「やってみましょう」という姿勢が重要です。ただし、問題が起きたときにどう対応するかをあらかじめ決めておけば、協働のパートナーは増えていくはずですが、管理者の立場からすれば、音を出させない方が手間は少ないのですが、むしろいろいろ試してみる価値があると思います。ぜひ検討してみてください。

委員：兼ね合いが難しいですが、キックスの4階でも参入団体の会議を通じて共有を行っているので不可能ではありません。

久会長：音楽についてお話しすると、数年前に茨木市で若手ジャズミュージシャンが「駅前で演奏をしたい」と提案を持ってきました。すると周辺の住民の方々は大反対だったのですが、音楽が流れると良いと評価されることがあり、音の質がかなり影響すると思いました。

委員：青少年音楽フェスタに軽音楽部が参加しているのですが、出演者はまだ高校生でプロではありません。演奏中に楽器の音がボーカルの声を覆いかぶさるように鳴り、歌が聞き取りにくくなることがあります。今回もキックスで演奏しましたが、「やめてほしい」という苦情はまったく出ませんでした。今年は約30組が出演し、イベントは20年近く続いています。教育委員会だけでなくさまざまな局の協力でさらに盛り上げていただけるとありがたいです。来場者は主に出演者の家族や友人程度で、以前はラブリールホールで数十万円規模の経費がありました。現在は会場をキックスに移しています。観客が多く来てくださると出演者も運営側も励みになりますので、集客面での支援をいただければ幸いです。我々だけでは限界がありますので、皆さまのご協力をよろしく願います。

久会長：では3つ目の市民相互の協働促進についてです。自治会加入率が下がってきているというのは、先ほどお話しした内容と関連しています。

岡島副会長：防災のイベントで高校生と連携していた取り組みは、今後もぜひ継続していただきたいと思います。また、本市を軸にしている企業で防災など興味を持っている企業はありますか。

事務局：今年度より「公民連携課」という部署が新しく設置されました。この部署では

包括連携をはじめ、多様な取り組みを進めています。そこで今回も交流会に向け、公民連携課から包括連携を結んでいる先へ案内を依頼しています。包括連携も馴染みがありませんので、地域の方々が参加できる会を開催し、そのご案内を行うなど、懸念の共有や課題解決につながる具体的な取り組みを進めています。

久会長：地域連携や社会連携は皆さんとても熱心ですのでチャンスだと思います。

委員：回覧板ですが、南花台地区では電子回覧板への移行が進んでいます。該当地域では試験的に導入を始め、かつ市が窓口になって順調に進んでいます。南花台の自治会（戸建てのみ）では約60数パーセントが現在電子回覧を利用しています。このシステムにより、住民はいつでも必要なときに情報を確認できるようになり、以前は白黒コピーを提供していましたが、電子版はすべてカラーで掲載され、小中学校の活動など子どもたちの様子が色鮮やかに伝わります。電子回覧の導入は班長や役員の負担軽減に寄与するとともに、加入者や役員のなり手を増やす狙いがあります。自治会の様々な活動についても積極的にアピールしていますが、若い世代が転入しても会員にならないケースが多く見られます。引き続き「こういう活動がある」という周知を続けていますが、まだ参加につながらない方も多いのが現状です。今後は加入者を増やすための具体策が必要だと考えています。市役所の皆さまにもご協力をお願いしたいです。

久会長：ありがとうございます。他いかがでしょうか。それでは評価に移ります。

岡島副会長：資料を見ると、数値が上がったり下がったりしているのでAではなくBだと思います。

久会長：Bにしましょう。交流会や先ほどの講演会のテーマで言うと、数値が上下するので難しいと思います。続きまして、若年層をターゲットとした事業や制度についてです。

#### ※案件②について事務局説明

久会長：ありがとうございます。改定案を中心にとということで、1番の日程見直しは良いと思います。それでは、2番の募集項目について議論してください。

岡島副会長：次世代コースの新設を検討しているのは素晴らしいことだと思います。年代に

関して言えば、高校生も学力テストではなく総合選抜でプレゼンテーションも評価されます。補助割合は高校生の場合だと10分の10が良いと思います。大学生の場合でも自腹を切る割合が増えると難しいので、10分の10が良いと思います。補助金を1回で30万円は額が大きいので、上限10万円はいかがでしょうか。また、スケジュールに関してもタイミングが重要で、タイミングが悪いとそもそも申請しないことも想定されます。

事務局：タイミングも含めて次回の学校訪問時にご相談を考えております。

久会長：大学生にとって4月のプレゼンテーションは難しいと思います。

委員：学生だけではなく地域の青年団も応募できるようにしませんか。

事務局：学生とは記載せず、年齢を条件にしようと考えております。

委員：地域の青年団であれば、南海トラフ地震の備えにも繋がる活動ができます。

岡島副会長：地域の青年団は良いと思います。お祭りだけでなく防災にも繋がるのは非常に良いと思います。

久会長：泉大津市では、地域の青年が中心となって他の方々と協力し進めてくださっています。地域によっては、地車が少なくなっているところも多いため、全体として広くPRしていく必要があると考え活動しています。また、小学校や中学校に出向いて地域の魅力を発信する取り組みも良い考えだと思います。地車に関わる活動だけでなく、地域とのネットワークを築き、幅広く協力体制を整えることが重要です。そうした取り組みが評価されれば、活動が認められ、成功事例として紹介できると考えています。ちなみに、39歳以下の方は青年会議所にも参加できます。また、補助金に関してですが、私も30万を使い切るのは難しいと思いますので、10万円が関の山だと思います。

#### ※交流会について事務局説明

久会長：よろしく申し上げます。これで懇談会を終了いたします。ありがとうございました。